広州アジア大会を終えて

飛込国際審判員　安永　三郎

今回のアジア大会でのメダルの数は１つであった。シンクロでもやはり中国が強い。次にマレーシアが確実に力をつけており日本は取り残された格好だ。北朝鮮・韓国が次に来ているが決して勝てない相手ではないと思う。

勝つためにはどうするか。勝つためには日本でもっと競技をメジャーにしなければならない。ＴＶ局でスポーツ局みたいな局があってもいいではないか。１日中スポーツを取り上げて、その中の１つが飛込競技であればいい。そうする中で選手に自信、その他の心構えができてくる。それこそ祖国の力などを身に付けさせるべきである。そんな力が中国、マレーシア、マカオ、北朝鮮などの国にはあり、どの国を見ても力強さを感じた。国力がものをいう。日本の国力が弱いということではない。強い競技もあるからだ。しかし競技力は弱い。日本の強化費などの配分の差があるような気がする。また強化費にできるだけ頼らないですむシステムができればいいと思う。飛込競技を企業にもっと売り込むことが必要である。広告宣伝をやるなかで第三者的に飛込を見て意識のレベルアップを図る。飛込関係者は飛込競技から一歩離れて競技の在り方をみる必要がある。

日本の選手はなかなか表に（表面に）顔をで出さないで自分のことで精一杯であるという感じがする。自分自身で余裕を持つことはいいことだが、もっと気持ちをオープンにして日本チームの存在感を示すことが必要である。そういう点からみても寺内健君の選手としてのカムバックは意味が大きい。

強化の中でシンクロナイズドのおくれがある。日本ではシンクロはチーム事情で選手がいないなど二の次的な見方があるが、他の国ぐにを見ているとシンクロでただそろって飛ぶことだけでなくより１０点を目指している。こういう感じを強く受ける。今後、日本はシンクロダイビング用の選手で強化していくのも１つの手である。いずれにしてもこのままだと他国との差はどんどん広がりそうである。

一人ひとりは大変良かった。渋沢選手、岡本選手、坂井選手、（もちろんその他の選手も）とくに渋沢選手は日本の競技会ではあまり抜き出ていた感じはなかったが、このステージに来ると非常に目立っている。みんな身長が低い選手の中でのあの演技はいい。４０３Ｂで私は９点をだしたが他の審判は７～7,5 であった。入水の強さをしっかりと演技しなければいけない。よわよわしい演技であれば水は切れるはずもない。ボデイラインを意識的にしめ入水までその強さを持続させなければノースプラッシュの権利はない。

この大会期間中に北朝鮮と韓国の砲撃事件が起こったが、改めてアジアは１つなのだと思った。また、中国の尖閣諸島における国民感情も改めて事を大きくするものではないし何の問題もなかった。そして、この機会を与えてくださった日本水泳連盟に感謝し筆を置くことにする。